

可塑境界研究

近代建築とは異なるアプローチ、つまり、近代建築とは異なる設計の方法を模索したいと考えた。現代建築を再考する為に、近代、またさらにそれ以前の建築について遡ううえで、近代建築を再考する必要があると考え、それらを概観することから始めている。そして、最終的にはハンス・シャロウンの作品の分析を行い、シャロウンの建築の平面をダイアグラム化することでその空間を分析している。

<可塑境界>

ローマのサン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂は、バロックを代表する建築であるが、この建築は、外部からえぐられたように外壁が凹み、外部空間を囲うような外形をもっていると同時に、内部は楕円形の集中式平面の空間をもっている。この特徴的な壁のプランは、外部の空間と内部の空間の残余として自然に生まれているように見える。本研究のタイトルである「可塑境界」とは、サン・カルロ聖堂のように、空間と空間との残余として立ち現れる空間的ボリュームをもった「境界」のことを指している。

<CIAM創立会議とフーゴ・ヘーリング>

1928年から1953年まで9回にわたって世界各国から建築家を集めて開催されたCIAMは、文字通り近代建築のその後の動向を決めるものであった。フーゴ・ヘーリングはル・コルビュジェらと同時代を生きた建築家であり、コルビュジェと共にCIAMの創立会議の席にいた。

ヘーリングの理論は、「器官」つまり「器官」というキーワードで建築理論を展開しているもので、空間を人間の活動を包む固有な形態として捉え、それらが組み合わさったものとして建築を考案しようとする態度であった。それは、コルビュジェの幾何学によって空間を分割していく理論と対照的な、加算的な設計手法であったと言える。そして、コルビュジェとの論争の末、ヘーリングはCIAMを脱退することになる。

ここに近代建築の分岐点があったのではないかと考える。近代建築運動をつくっていたCIAMを中心とした運動とは別の、もう一つの可能性として、ヘーリング、そしてヘーリングと共にドイツから命ぜらずに国内にとどまり、彼の理論を共有していた友人でもあるハンス・シャロウンを取り上げることで、近代建築とは異なるアプローチを模索する。

<ゴシックと近代・皮膜>

近代建築を鉄とコンクリートという材料による建築技術の結果として語るならば、近代建築はゴシック建築を新たな材料によって発展させたものであると言える。ゴシック建築と近代建築の共通点を一言で言うならば、「皮膜」によって包まれた空間を志向しているということである。

ゴシック建築は、厚く重い壁を飛梁によってスタンドグラスの皮膜と化す。内部空間と外部空間という対立関係を希薄にしてゆく試みであった。つまり、近代建築へとつながるような無限的な空間の獲得を志向していた。一方で、後期ロマネスクとしてのバロックとは、ゴシックとの比較で言えば、内部空間と外部空間という対立を再び立ち戻ることであったと言える。

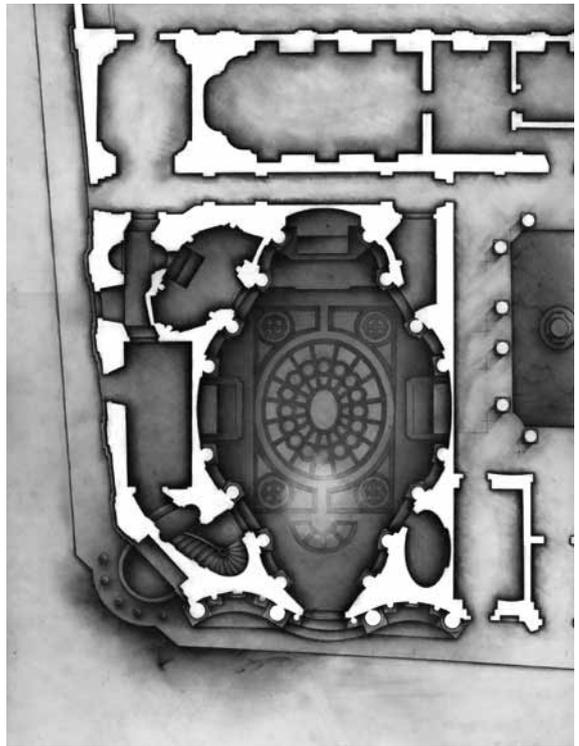
<バロックとハンス・シャロウン>

中世と近代における近代的なものに対する対立項を探ることで導かれたバロックとシャロウンという二つの空間を、関連させて考えることで、近代建築とは異なる方法論が見い出せるのではないかとという仮説のもとに、分析を行った。具体的には、シャロウンの建築をバロックに見られる可塑境界という概念を導入することで読み解いていく。

ルネサンスの正円を楕円に歪めたバロックは、建築の内部空間に楕円を導入し、歪めていくばかりでなく、建築の外形も歪んだものへとなっていく。それは、外部空間を建築の外形を歪めることで削り出す、外部空間に設定された円や楕円で建築を削り取っていくという操作である。逆に言えば、建築の外形によって外部空間を包み込んでいくことである。バロック建築に於いて、「壁」は外部に面する表面と内部に面する表面という二つの表面として捉えられ、壁というマスは異なる二つの次元で操作されている。バロック建築とは「2つの表面をもつ可塑的な塊」つまり、本研究でいうところの「可塑境界」の内内外からの操作と見ることが出来る。ところで、ヘーリング/シャロウンの空間を固有な形態として捉える思想は、複数の空間が接する際に自然と残余を生じることになる。そのような空間の残余に着目してシャロウンの空間を見ていくと、その残余部分に操作が加えられることに気付く。その操作は、空間の境界を空間的なボリュームとして操作する、可塑境界の操作と言えるものであった。

シャロウンの空間、特にベルリン・フィルなどの戦後のプロジェクトは図面からは空間を読み解くことが困難なほど複雑なものになっている。シャロウンの空間を分析するにあたり、インターナショナルスタイルから離れた後の、そして戦後の数々のプロジェクトへの足掛かりになっていると考えられるナチ政権下における住宅作品を中心に、特徴的な7つの住宅を取り上げた。規模の小さい住宅作品をダイアグラム化することで、シャロウンの建築におけるプライマリーな空間の型を抽出できると考えた。

分析の方法は、まず、平面図から軸線とそれに沿った矩形を抽出し、それらの矩形が接する部分、重複する部分を可塑境界として読み取っていく。分析は、シャロウンの平面図をダイアグラム化することにより行い、分析結果として7つのダイアグラムを作成した。この分析は、シャロウンの空間に於いて可塑境界が空間同士の関係性をつくり、空間同士の連続・重複・分化等を生んでいることを読み取る作業であった。また、作成した7つのダイアグラムを合成して住宅を設計し、本研究が新たな建築の方法論として展開できる可能性を示した。



I CIAMとフーゴ・ヘーリング

1928年から1953年まで9回にわたって世界各国から建築家を集めて開催されたCIAMは、文字通り近代建築のその後の動向を決めるものであった。フーゴ・ヘーリングはル・コルビュジェらと同時代を生きた建築家であり、コルビュジェと共にCIAMの創立会議の席にいた。

ヘーリングの理論は、「器官」つまり「器官」というキーワードで建築理論を展開しているもので、空間を人間の活動を包む固有な形態として捉え、それらが組み合わさったものとして建築を考案しようとする態度であった。それは、コルビュジェの幾何学によって空間を分割していく理論と対照的な、加算的な設計手法であったと言える。そして、コルビュジェとの論争の末、ヘーリングはCIAMを脱退することになる。

II 近代

近代建築を鉄とコンクリートという材料による建築技術の結果として語るならば、近代建築はゴシック建築を新たな材料によって発展させたものであると言える。ゴシック建築と近代建築の共通点を一言で言うならば、「皮膜」によって包まれた空間を志向しているということである。

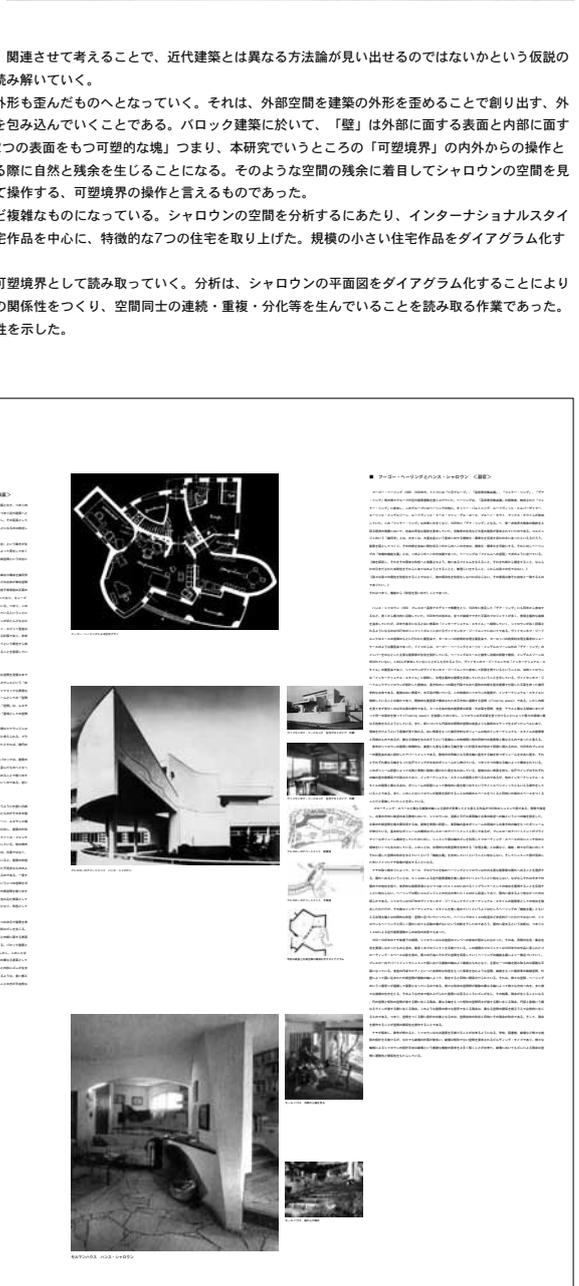
ゴシック建築は、厚く重い壁を飛梁によってスタンドグラスの皮膜と化す。内部空間と外部空間という対立関係を希薄にしてゆく試みであった。つまり、近代建築へとつながるような無限的な空間の獲得を志向していた。一方で、後期ロマネスクとしてのバロックとは、ゴシックとの比較で言えば、内部空間と外部空間という対立を再び立ち戻ることであったと言える。

III オルナタイプ・モダン

ナチ政権下における住宅作品を中心に、特徴的な7つの住宅を取り上げた。規模の小さい住宅作品をダイアグラム化することで、シャロウンの建築におけるプライマリーな空間の型を抽出できると考えた。

IV シャロウン・ベルリンのプロジェクト

シャロウンの空間、特にベルリン・フィルなどの戦後のプロジェクトは図面からは空間を読み解くことが困難なほど複雑なものになっている。シャロウンの空間を分析するにあたり、インターナショナルスタイルから離れた後の、そして戦後の数々のプロジェクトへの足掛かりになっていると考えられるナチ政権下における住宅作品を中心に、特徴的な7つの住宅を取り上げた。規模の小さい住宅作品をダイアグラム化することで、シャロウンの建築におけるプライマリーな空間の型を抽出できると考えた。



可塑境界／方法論の試案

作成した7つのダイアグラムを合成することにより、一つの建築モデルを設計した。可塑境界がつくる領域（図形）を重ね合わせる／可塑境界がつなく空間（図形）を他のダイアグラムに差し替える、等の操作によってダイアグラムを合成した。
この建築モデルを設計することにより、パロック／ハンス・シャロウンから抽出した可塑境界という概念が新たな建築の方法論として展開できる可能性を示した。

